
白花に消えるとき

大久保 唯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白花に消えるとき

【Nコード】

N1514X

【作者名】

大久保 唯

【あらすじ】

「白い花」が包み込んだ「世界」。その美しくも残酷な花は、町を蝕み、人を飲み込んでいった。家族や友人を失い、絶望に駆られていた少年・八木智哉は、その世界に生き残り、終わりゆく世界をただ待つしかなかった。けれど、そんなとき、彼女は問いかけた。「どうせ終わるのなら、世界の果てに行きませんか？」と。これは、世界が終わる少し前にあった、小さな旅の物語。

1 (前書き)

生きること、それは日々を告白してゆくことだろう／尾崎豊

吐息が一瞬だけ白を帯びたような気がした。

下駄箱に身を転がしている、土煙と擦れた傷ばかりが覆うスニーカーに指をひっかけると、ニット帽に埋もれかけた顔が、冷気に襲われた。すっかり人気のなくなった校庭には、荒地化した様相を象徴するかのように枯れ果てた雑草が点々と茂り、テニスコートや陸上競技場から聞こえてくる声も日に日に小さくなっている。

俺はスニーカーの底をほじくるように、足をねじ込んだ。タイル張りの床に広がる校庭の砂の残りようが妙に生々しい。マフラーを巻きなおして、昇降口を後にすると、乾いた空気に踊らされた空が、また冷たい風を運んでくる。俺はすんと鼻を鳴らして、音楽プレーヤーの曲を再生した。

空の彼方に響くヘリコプターの旋回音、鳴り止まないサイレン、少しずつ音を薄めて行った繁華街の方の喧騒。たった半年でこれだけ変わるのか、と思うと、本当に滑稽に思えてくる。世界なんて簡単に終わる。昔聴いた言葉は確かに現実味を帯びていた。背中に語りかけてくる声の気配はなく、時折俺を過ぎ去る、同じ制服に身を包んだ影の表情は決して晴れ晴れとしたものじゃない。そうだよなと情けない言葉さえもが漏れてきそうだった。こうしてダツフルコートのポケットに手を突っ込み、耳元で聞こえてくる好きなアーティストの声に耳を澄ませ、暗記したばかりの英単語を呟く。それだけのことしか手に入れていないのに、酷く胸が痛い。俺は早足で駐輪場へと向かった。

「あ……」

声が漏れる。

駐輪場の先の、桜が林立する広場の片隅で、その色が俺に語りかける。皮肉にも、その色は酷く美しかった。何層もの水晶を重ね、熟練者が作り上げた白亜を象徴するかのような、混じりけのない完

全な「白」。その花びらの前に一瞬だけ、立ち止まってしまふ。百合に似た、けれど致命的に違う美しさを見せる花は、見るだけで美麗さへの眩惑と、いわれもない怒りを俺に覚えさせる。けれど、その花を前に俺は何もすることができず、自転車のペダルを押して、帰路に就く以外何もできなかった。高校生のガキである俺は、無力な存在だ。言葉や力でどんなに持論を説いても、結局跳ね返される。だからこそ、不可能な抵抗心はもうどこかへ捨ててしまった。今の俺は、ただこうして残された世界の中に生きる人形のようなものではないのかもしれない。

*

「白い花」が最初に発見されたのは、一年半前のメキシコシティのことだという。

突然変異種として学会にも大体的に取り上げられたその花には実は正式な名前が出来上がっておらず、多分この先その花に名前が付けられることもないと思う。理由は明確だった。

「白い花」が発見された夜、発見されたメキシコシティの郊外で、村民およそ四百人が一夜にして姿を消したのだ。最初はUFOの存在もたびたび確認できるメキシコだけあって、UFOによる神隠し説が唱えられたのだが、事態はそれだけにとどまらなかった。突如出現した「白い花」は猛烈な速度で南北へ繁殖していき、発生から一か月を過ぎたころには南北アメリカ大陸全土に出現するようになった。そして、発生したその町では、同じように失踪が相次いだ。原因不明の世界的な失踪により、アメリカを中心とした調査団が調査に乗り切ったらしいのだが、明確な原因は追及できなかった。そして、仮説としてある一つの推測が立てられた。それが、「白い花」によるものだった。

花が鱗粉を散布する時間、繁殖速度と照らし合わせた結果、失踪した人間の大半は受粉を本格的に開始した時刻とほぼ同じ時刻に姿

を消している。明確な証拠が何一つないとすれば、考えられる理由は、これしかない。

そして世界規模に通達された、「白い花」の燃焼計画が実行され、事態は収束に向かうと予想された。

しかし現実はその簡単なものではなかった。根まで焼き払われた花は、自分たちが植生していた地盤に種を残しており、残された種から繁殖が無限に繰り返され、花は決して滅びることがなかった。美しい花には毒があるとは言われるが、それ以上の恐怖を呼ぶ花が、「世界」に生まれることになったのである。

「……とは言うけどさ、国連も情報操作してるらしくて。明確なデータは出てないんだよね。とりあえず受粉時間の夜には基本外出禁止って通達が出てるだけだしねえ」

妙に感慨深そうに言った理沙は、少しだけはにかんで見せた。昼休みが終わりに差し掛かったころ、品数の少なくなつた購買で買つたらしい菓子パンをかじりながら言う理沙の言葉は酷く自嘲気味で、眼鏡の奥の瞳は笑っていなかった。センター試験用の赤本に釘付けになっていた俺は、ニュースやNHKのドキュメンタリーなんかでこの事件が頻繁に放送されるものだから、言われるまでもなくそんな基本知識は備えている。世界人口が減つた今でも、ネットの波に漂えば自然と裏情報も入ってくるし、定型化してきた理沙の言葉に耳を傾けるまでもない。

すると、視界の先の選択肢が消え、代わりに釣り上つた目をした理沙の視界が入った。気怠い声を上げた俺は、ようやく理沙が日本史の赤本を取り上げたことに気づき、参考書を取り上げようとするけれど、理沙は俺の手をかわしてくる。

「返せよ」

「話くらい聞いたつていいじゃない！　うちのクラスだつて人数減つちやつたんだから、少しくらい仲良くしようよ！」

「仲良くしたいのはいいよ、だけど結局センター試験も中止にならねえし、もう一か月ねえんだぞ？　少し現実見ろよ」

閉口した理沙から参考書を取り返すと、付箋の貼られたページを開き、マーキングされた箇所を改めて確認する作業に移った。すると、酷く沈んだ声が周辺に滲みだし、俺は文字を追う作業を一瞬だけ止めてしまう。

「……八木は変わったよね」

「変わらないやつの方がいないだろ」

お前は分からないのか？ 人が消えてるんだぞ？ 家族を無くして孤児になった子だっているんだぞ？ 周りの友達が何人消えたと思ってるんだ？

そんな問いかけが浮かぶたびに、俺は言葉を飲み込み、理沙の顔を見ようとはしなかった。理沙も理沙で、あれ以来変わったのだ。

以前は天真爛漫で自分の弱音を見せることなんてなかったのに、今ではこうしてことあるたびに涙するようになった。けれど、俺には理沙にフォロースする言葉も、しぐさも見つけることができずに、その間は言葉を交わさなくなるという状況が続かなくなったのだ。

神様は残酷だ。

俺がもし神様だったら、こんな世界を作らなかった、なんて言葉を言うことはできないけれど、それでも非情だと思う。けれど、こうしたことを考えること自体がエゴに直結するんじゃないかと言う自己嫌悪すら最近生まれ、自分でも本当に何を思っているかなんてわかりやしない。そんなことを思い、変わろうとしても、もしかしたらどこかで「俺」という存在は消えてしまいかもしれない。そう思えば、誰もがその「変わり果てた自分」から脱却しなくなる。悪循環ではあるけれど、それが正しいあり方だというのも、皮肉なものだ。

その日も俺は、理沙にかける言葉を思いつくことができず、机の上に鼻を立てて小さな嗚咽を漏らす彼女の前で、機械のように参考書を読みふけた。

けれど、文字は何一つとして頭に染み込まない。変わりに入り込んでくるのは、遠い昔のようにも感じる、小さな記憶のピース。駅

前のクリスマスツリーの前で見た、あの儂い影ばかりが浮かんできて、そのたびに参考書のページをくしゃくしゃにしてしまう。プレゼントしたての手袋を嬉しそうにはめて、頬に静かなキスを与えてくれた記憶。

目を伏せた俺は、髪の毛を二、三本引き抜き、目をこすった。俺の周りのクラスメイトは、俺同様に参考書を読みふけているものもいれば、談笑をかわすのもいる。連日曇りばかりが続く窓越しの世界は、いつにもまして無色だった。多分、この先この世界が本当に彩ることなんて、多分ありはしない。

あつたとしてもそれは、あの花が与えた、一瞬の夢に過ぎない。

三学年に進級してから、三人目となる担任の号令で、一日が終わる。教室に点在するクラスメイトの表情を一瞥して、俺はカバンを引き上げて教室を出た。クラスメイトの表情は、模造したかのような表情ばかりで、世界同様に色がない。けれど、そんなことにも気にせず俺は、上履きの底で音を鳴らしながら昇降口へ向かう。階段を下りる感覚すら、今の俺には見当たらない。

一階に降りたところで、この学校は吹き抜けの中庭に直結する構造になっている。廃部寸前の園芸部が手入れするプランターがきれいに並んでいるはずなのだけど、さすがに今の状況ではあれ以来に比べて見劣りしてしまう。バンジーやマーガレットは所々で萎れており、中庭の中にまで侵食してきた白い花が、川沿いの葦みたいに立ち並んでいた。

「今度の中庭の手入れは未定ですよ？」

「え？」

中庭に瞳を落としていた俺に語りかける声の方へ俺は振り向いた。天然パーマがかかった髪が特徴的なその女子生徒は、怪訝な目で俺の方をまじまじと見ていた。そりゃそうだ、世界を激変させた原因となる花に見とれている俺は、ある意味で常識から外れている。俺は無言のまま背中を向けようとしたところで、その女子生徒は焦燥

したような声を上げる。

「マーガレット……好きなんですか？」

中庭の隅っこに花を咲かせる黄金色の命に、俺は思わず目を向ける。言葉の代わりに、首を横に振った。

「すみません、余計なお世話でしたね」彼女は苦笑する。「珍しいから、思わず声かけちゃったんです。もともと中庭に関心のある人なんてほとんど見たことなかったのに、あれ以来見向きもしなくなっちゃったから……。あの花がなくなれば、もう少しきれいに手入れができるんですけれど」

「……園芸部の子？」

彼女が胸の中に抱えたゴム手袋や、小さなアンプルの入った袋や、シヤベルを見た俺は乾いた唇を開く。

「はい。一年の新人部員ですけど。ほかの先輩方とかが、ほとんどいなくなっちゃって」

震えかけの言葉は、何故か優しいイントネーションを持っていた。人は笑顔でいる方がずっと悲哀を持ち合わせている、とどこかで聞いたことがあるけれど、まさにその通りだ。華奢な体は微かに震えていて、どこか引きつったかのようにも見える頬は不自然に持ち上がっている。見ているのが辛い。あれ以来、こうして強がりや身に付けたやつを多く見てきたけれど、傷心しきった俺たちはその笑顔にも弱さを見抜くことができていた。それは酷く悲しいはずなのに、胸にこみ上げてくる感情は冷たいものだけだ。

「今から少し手入れしますけど、やってみますか？」

「いや、いい」

彼女はそうですかと一言つくと、軍手をはめて、中庭の土壌を踏んだ。雑草の代わりに、吹き抜けから注ぐ微かな太陽の光を浴びる白い花は、残酷なほどに美しかった。それこそ、マーガレットやバンジーなんかには比べ物にならないほど、宮廷で数多くの寵愛を受けた楊貴妃のように。

それでも懸命に命をつなぐ雑草を少しずつ引き抜く彼女は、ゴミ

袋に放つていく。レンガで区画ごとに設けられた花壇の中に咲く、固有の色彩を帯びた花々は、ある意味で何か共感を与えてくれる。人と花がこうして同等の境遇を抱くなんて、と思うと、苦笑と哀愁しか漏れてこない。

しばらく俺はそうして彼女の黙々と続く作業に見入っていた。興味もないことに何故か惹かれて、こうして時間を過ごすというのは久々な気がした。雲が少し冷めて、夕焼けが少しだけ顔を出し始めたころ、俺は彼女に手を上げて、中庭を後にした。こうして殊勝に作業を続ける彼女を見ていられない弱い自分が出たのか、本気で受験に向けて勉強しなくてはいけないという虚勢を張った自分が出たのか、俺にはよく分からない。

駅前のマンションの最上階から下二つのフロアの、3LDK。

無理をして分譲したこの部屋にも、今は俺しかない。中学生に上がった頃、親父が貯金してきた金を叩いて買ったところを思い出すと、無性にやるせなさがこみあがってくる。高校三年の俺がこうして何とか一人で暮らせて行けているのも、家族のために稼いでくれた両親のおかげだし、生活費も母方の親戚の援助があつて何とかなつてはいる。けれど、その親戚もいつ消えるかは分からないし、俺だつていつまでこうして孤独な根城にいられるかも分からない。変わらない稼働音を立てる冷蔵庫にも生活できるだけの食料は入っているけれど、日に日に食欲は減るばかりだ。

ちゃぶ台の上に転がったテレビのリモコンを手を取ってスイッチを押すと、夜闇が包み始めた部屋に、青白い光が灯る。バラエティやスポーツ系の類の番組も随分と減った。深夜アニメも声優の消失によりほとんど見かけなくなったし、放映しているドラマも再放送のものがメインだ。番組の大半を占める、世界の現状を報道するテレビを誰が見るのか、と言いたいけれど、それに釘付けになっているのが俺ですというのは、滑稽としか言いようがない。地理的なことはよく分からないのだけど、アフリカや中東のどこかの国では消失により治安はズタボロで、一部の小国は丸々人口がゼロになつてしまったなんてところもあるらしい。億単位の人口を持つ俺の国も、いつこういった状態に陥るかなんてわかりやしない。

八木は、変わったよね。

昼の理沙の言葉が、妙に胸に押し掛かる。カバンからはみ出した赤本には、帰宅してからほとんど手を付けていない。変わらさず行われるセンター試験も間近だというのに、これじゃ受験生失格だ。受験に備えて家具は必要最低限の物までに整理したというのに、ちゃぶ台の下に転がった教科書やノートの類はまだ真新しく見えてくる。

その時、インターフォンが響いて、部屋中に呼び出し音が響いた。最近よくあることで、浮浪者を装って強盗に入るのが増えたなんてのもよく聞くし、宗教団体への勧誘も増えた。気怠さを持ちながら、受話器を取って応じると、そこに聞きなれた声が飛んでくる。

「よっ」

「松田？」

カメラ越しに松田は野球部独特の五厘狩りを見せつけると、「開けて」と野太い声で言った。強盗防止のチェーンを外して、ノブを引くと、松田がコンビニで買ったばかりであろう缶コーヒーを見せつける。

「暇？」

松田はひよっこりと顔を出す。

「勉強する気にはなれないだけ」

俺は気怠い声を上げた。

「じゃあ、上がってもいいよな。てかさ、暖房すらつけてねえみたいけど寒くないの？ 外、結構風強いぜ」

「心は熱いから」

「笑えねえよ。八木んち、床暖房あったよな？ それでいいかな。」

うわ、電灯くらいつけるよお前」

廊下を進んでキッチンの方に姿を消した松田は、初めにリビングに明かりを灯すと、次に冷蔵庫のそばの操作パネルを慣れた手つきでタッチしていく。俺同様に家族を失った松田はたまに俺の家に転がってくるのだけど、俺よりもこの家の構造を熟知しているような気がする。

「そつだ、弁当温めていい？」

「お好きに」

コーヒーの入っていたレジ袋とは別のレジ袋から、松田はコンビニ弁当を取り出すと、レンジを起動させて温め始める。

俺は松田から受け取ったコーヒーのプルタブを引き、一息ついて煌々と照るリビングに腰を落ち着かせた。甘みの薄いコーヒーが舌

にまとわりつく。

レンジが声を上げたところで、松田が弁当を持ってくると、テレビの画面を一瞥する。

「またニュース見てたの？」

「まあ」

「やめとけって言ったる。気が滅入るし、ジャンプかなんかでも買ってきて読んでればいいじゃねえか。小学館系とか講談社系はほとんど廃刊になったけど」

漫画あまり読まねえからなあ、と苦笑して立ち上がると、俺も冷蔵庫に眠った揚げ物の類を取り出してレンジにかけた。松田とこうして話すときだけ、硬化した心がほぐれて、気が楽になる。友人の数もだいぶ減ってしまったけれど、一人こうしているだけでも心強い。

床暖房が少しずつ暖を増してきたところに、松田がカーテンで遮られていない窓から見える街並みの方を見た。ガラス越しに、ネオンや照明の減った街を見ると、白銀の粒が舞っていて、思わず目を奪われてしまう。

雪だ。

クリスマスをまだ数週間後に控えているというのに、随分とせっかちな、と声が漏れてしまう。松田が弁当を平らげ、箸を空になった弁当箱に投げ入れたところで立ち上がり、ベランダに出た。小粒の白が月明かりに共鳴して、幻想的だった。終わり始める一日が少しだけ彩り始めて、微かな歓声を街に呼ぶ。闇に隠れ、点在する摩天楼が銀を際立たせて、闇の中に光を呼び込んでいる。

「久々に見た気がするよ、雪」

「俺も」

松田がベランダから手を伸ばして、雪が舞う中に手を入れる。指先に乗った粒は簡単に溶けてしまっ、輝きは儂く潰れて行った。

松田は一瞬だけらしくない、寂しげな表情を見せて、俺の方も向かずに部屋の中へと戻ってしまっ。床暖房に寝っ転がって、一息つい

た松田を見ると、俺はベランダの窓を閉め、垂れ流しにされていたテレビの電源を切った。

「なんかあった？　いつもの松田らしくもねえ」

いつもは少なくなつた男連中と馬鹿騒ぎをして、クラスの中でも真ん中において、強気な発言が多かつたはずなのに、出てくる言葉一つ一つに力がない。そう言つてやると、松田は苦笑して頬を軽く持ち上げる。

「んー、別に。やっぱり俺も周りの人間次々消えて平気でいられるほど強くねえからさ」

呼気した松田は、寝ながら缶コーヒーのプルタブを引き、のどを鳴らす。無精髭にコーヒーの色がついて、みすばらしくも映つた。

俺が缶コーヒーを飲みほしたあたりに、松田は腰を立てて、ひじを立てた。のど仏が震えるような低い声を出したとき、松田の表情は笑えないような表情をしていた。

「あのさ、八木」

「ん？」

「もし俺が他の連中みたいに消えたらさ、お前は悲しむ？」

「……悲しまねえつて言つたらうそになるけどな。やっぱり仲いい奴がいなくなるわけだし」

そうか、と呟くように声を出した松田は、長年つきあつてきた俺が見たこともないような、そんな表情をしていた。淡々とした性格になつていた俺は、残酷にもこのときの松田の心境に詰問することすらできず、味気ない会話を重ねて夜を明かした。夜明けごろになつて松田を見送つた時の表情は、多分心のどこかで永劫残るような、そんな気がしていた。

松田が「消失」した、ということを目にしたのは、連休明けの朝だった。沈んだ声で理沙にそう告げられた時には状況が理解できず、教室の自分の机の前で硬直してしまつた。

「藤巻君が松田君の家に行ったときにはもういなかったみたい。先

生が親戚の人に連絡取ったりもしたけど知らないらしいし、松田君が住んでたマンションの防犯カメラ見ても松田君の姿は無かったんだって……」

消えた。

あの松田が。

ほんの三日前には肩を並べて飯を食べていたのに、消えた。

ひどく現実味がなかった。あとほんの数分すればいつものようなあくびを上げながら、無駄に高い教室のドアから出てくるんじゃないかと疑うほどに、現実感がなかった。

なのに教室は、いつもと同じように、虚無的で、冷徹な空気が流れている。誰も最後尾中央の席に陣取っていた松田のことに話して話していないし、話すと言えば、少しばかり街に積もった雪のこととか、センター試験のこととかぐらいだ。誰も、残酷な現実を目を向けないで、こうして変わりすぎた歪な日常から逃げようとする。

人としては当たり前で、確かに俺もいままでこうしてきたはずなのに、なぜか酷く胸の奥が痛む。

「……なんで、クラスメイトが消えたのにみんなこうしていられるんだよ」

不意に声が漏れる。

「だって、そうでもないみんな立ち直れないじゃん」

氷の刃にも似た、理沙の言葉が、俺の言葉をえぐる。

「根底はみんな悲しいよ、でも切がないの、割り切るしかないんだよ。そのたびに感傷的になって、悲しんでもまた誰かが消えて、それでまた悲しむなんて、みんな嫌なの、分からないの？」

柄に合わないように言葉を吐き捨てた理沙の横顔は、少しだけ淀んで見えた。背中を向けた理沙は、そのまま教室を後にしてしまう。俺は自席の上でくたびれているカバンをしばらくは呆然とした表情で見下ろしていた。誰も俺に言葉をかけなかったし、俺としても声道が死んでしまったかのような感覚に襲われて、しばらくその場から離れることができずにいた。

みんな、嫌なんだ。

こうして友達が一人ずつ消え、そのたびに感傷的になることを、誰もが恐れているんだ。

表面では分かっていた言葉も虚栄を剥がされて、本当の自分がどれだけ理想家だったのかと実感させられる。心のどこかで俺はこうした非日常で非現実な現実から逃避して、「なんとかなる」なんて楽観的に考えていたのかもしれない。情けなくて、心の中で哀れな笑い声が聞こえてくる。

気づけば俺はカバンを持ち上げて、粗暴に机を蹴り、教室を後にした。自分の情けなさの後押しするように、足早に教室から離れていく。チャイムが鳴り始めたところで屋上につながる階段に足をかけ、息を切らしながら階段を上がっていく。授業の始まったであろう校舎では、タンタンタン、と俺が階段を駆け上がる音以外の音が聞こえない。色のない俺の世界が、更に無地の空間へと呑み込まれていくような、そんな錯覚に陥りそうだった。

荒い息を噛みしめて、俺は奥上につながる扉の前に立った。色褪せた黒曜石のような塗装を帯びた仰々しい門の取っ手に手を掛けて鍵がかかっていることを確認すると、そのまま右肩の方に思い切つて引く。扉が開くと、乾燥した風が吹き抜けてきて、前髪が舞つた。

扉を閉めて、金属が震える音を体の芯に伝えると、コンクリの床を伝つてタンクが密集する方へと足を進めて行った。学ランの微妙な隙間から風が通つてきて、体が冷える。雲一つない空なのに、空の色は灰色だ。屋上の鉄格子の隙間から映える街並みは閑散と見えて、命を終え始める花々の骨格ばかりが新しい息吹の到来を待っている。

俺はカバンをタンクの傍に投げ捨てて、その場に寝転がった。何も考えたくなかった。虚無だけが世界を包む。やがて、それはクラスメイトや友人をも蝕み、俺が俺でなくなるような、そんな錯覚を覚え始めてしまう。二の腕がその震えに抗っていた。けれど、心の

内に宿る恐怖は冷めることもなく、次々に四肢が震えだしていく。ダガーナイフで今すぐ神経系を切り裂いてやりたくなるような、猟奇的な発想すら浮かんだ。

「畜生！」

意味もなく叫ぶと、冷やかな空気が喉を切り裂く。

「なんでだよ、なんであいつまで消えるんだよ……」

微かな嗚咽が混じる。松田は消えた。もう二度と俺の前に現れることは無い。非情な現実で、いつか俺の身にも起こるのかもしれないと考えると、涙が出てくる。死にたくない。切実な願望が、鼻声から漏れる。

死んだら俺はどうなるんだ。誰も悲しむことなく、俺は消えてしまふ。そんなのは、嫌だ。きつと、俺も、他の連中も。

袖で濡れた瞳を拭き、横に倒していた体を起こしたところに、俺は小さな影を見る。いつからその場所に立っていたのかは分からないけれど、理沙はいつも以上に神妙な顔で俺の赤く染まった顔を覗く。「邪魔だった？」

「別に」

素っ気なく答えると、理沙の表情が安堵に変わった。俺が胡坐をかいた横に理沙は腰を据えて、校舎の外を眺める。林立する住宅の屋根には、昨夜また降った雪がつつすらと残っていた。

しばらく理沙は何も口にしなかった。俺も、発現する気がそこまで湧き上がらなかったし、理沙の顔を見ているのが辛かった。一限目の授業終了のチャイムが鳴り終わったところで均衡が破れ、理沙がいつもよりたどたどしい口調で言う。

「もう、クリスマスだねっ」

無理に弾ませた声には、空元氣しか伝わってこない。

「……センター近いけど」

「いいじゃん、クリスマスくらい。ケーキ今売ってるお店あるかな？ 私、久しぶりにレアチーズケーキが食べたいなあ」

シュシュで束ねたポニーテールが震える。太ももの間に顔を埋め

た理沙の声が、少しずつとぎれとぎれになっていく。俺は何も言わずに、ただ灰色に淀む町を見落とすばかりだ。

二限目開始のチャイムが鳴る。

「……ごめんね」

「何がだよ」

「八木もさ、つらいよね。美紀に続いて……松田くんまで失っちゃうんだから」

つらいよね、そうだよね……そんな、感情的な言葉が虚空を突く。なんでだよ、なんでお前まで「あいつ」と同じこと言っただよ、と、俺は胸中で反芻する。いつしか彼女の語調は強みを増していつて、気づいた頃には彼女の声は涙に溺れていた。以前は決して俺の前で見せなかつた涙を流す姿は、酷く心に痛む。そのせいで、俺は彼女の肩を叩いてやることも、背中に手を回してやることも、言葉をかけてやることすらできなかった。

「……ごめん、泣いてばかりだ、私」

セーターの袖で瞳をぬぐうと、理沙はまた健気な笑顔を俺に向けてくる。口が半開きになるばかりで、何も言葉が浮かばなかった。

「どうせなら、クリスマスくらい迎えたい、って思ったんだ。もうこれだけ時間経っちゃってさ、いつ消えちゃうか分からないんだもん。だから、クリスマスくらい……」

「馬鹿！」

咄嗟に声が漏れた。痙攣する声帯を抑えることができずに、零れた言葉に、理沙は身を震わせた。

「お前まで消えるとかそんなこと言っつなよ！ だからみんな消えてくんだよ、もうやめてくれよ……」

鼻の奥に熱いものがつんのめり、俺は言葉を失ってパイプの上に腰を落とした。頭をかがめて、俺は視界をすべて遮った。何を言っただかなんて覚えてはいないけれど、胸の内に溜まったものが増幅していくような気がして、喉頭を切り取りたくもなった。隣で俺の背中を撫でながら、小指を絡めてきた理沙の声も遮りつつ、俺は脳

裏で叫び散らしていた。

なんで、こんな世界になったんだよ、と。

松田が消えてから二週間ほどたったころ、街は近づくクリスマスを前に少しばかり活気を取り戻していた。教室に見える頭もまばらになり、今朝の通達で学校の生徒数も半数に減少してしまったという校長の声明も出た。それがまぎれもない現実なのだけれど、まるで自分が小説の世界に立っているかのようで、校長と言う学校のトップが発言した言葉にも現実味を感じることができなかった。明日目を覚ましたらいつものように消えてったクラスメイトや友達がひよっこりと顔を出すような気がしてならなかった。けれど、それは自分の甘えと妄想がシンクロした虚構に過ぎなかった。

中身が薄くなりつつある授業を終えるチャイムが響き、担当教師が教室の扉をくぐったところで少し教室は騒がしくなる。男子の方が減少してしまったせいで、女子の声が随分と吸湿に響くようになった。白雲が映える窓際の中央で、女子生徒と談笑に耽る理沙の声が妙に響く。俺は俺で、男子連中二人から聞こえてくる言葉を適当に受け流していた。

「もうクリスマスだぜ？ 昨日見たけど、駅前のイルミネーションすげえんだよ。人少なくなったのに、その辺は妙に気合い入ってるんだよな。電車だって随分減ったのにさ」

「今年は女子と過ごしてーよな、なあ八木」

「え、ああ」

「でも八木は水橋がいるだろ」ああ、理沙か。

「水橋なあ、ポイント高いよな。おれ水橋とクリスマス過ごせるんならいいな」

長髪の方がそう言うと、眼鏡の奥でもう片方の奴が首を深く振って同意した。意外と理沙って男子からも人目置かれてるのか。昔から一緒にいることが当たり前になっていて、全然気づかなかった。

「レアチーズ食べたいって言ってたな、理沙」

「マジで？」 「じゃあおれ誘おうかな」 「ばっか、お前なんかに渡さねえっつーの」 「ねえねえ、なんか今私の話してた？」

気づけば理沙は、男子連中二人の間に割り込んで、耳に手を当てて言葉を探していた。理沙の周りの女子連中は解散したのか、もうほかの女子の影は教室にほとんどない。

「そうそう、クリスマスの話してただよ」

「クリスマス？ 駅前のイルミネーションとか？」

理沙がきよんとした表情で言う。毎年この時期になると、この街には駅前に巨大なクリスマスツリーが立って、イルミネーションが飾られるのだ。本来なら毎年その周辺はクリスマス限定の有名なデートスポットになって、わざわざその装飾を見に来るだけにほかの街からやってくるカップルもいる。

「今年もあるの？」

「やってるやつてる、おれ見たから」

長髪が答えると、理沙は目を光らせる。昔よく見ていた、瞳に光を灯らせる理沙の表情に、酷い安堵を覚えてしまう。

「よかった、あれ毎年楽しみにしてるんだよねー、きれいだよね！」

しばらく理沙や男子連中は、イルミネーションの話からクリスマスの話になり、やがて男子連中が理沙を軽く口説くところまで発展した。俺にはとてもまねなんてできない。もちろん理沙は言葉を巧みに使って野郎どもの言葉をけん制し、そのたびに二人は眉をひそめて呻っていた。

「えー、八木と行かないんならおれらと行こうぜ！」

「いやあ、智也がクリスマス一人でいるのが悲しいって言うからね、私がいてあげないとだめなの。イルミネーションは見たいけど、クリスマス以外でも見れるじゃない？」

「ちよつと待て俺は何も」

理沙に睨まれる。俺何か悪いこと言った？

「あーくそつ、なら八木、男三人だけでも行こうぜ！」

「え……と」

言葉が詰まる。

イルミネーションが綺麗なのは知っている。白と青を基調とした光源が街を包んで、幻想的な街並みを作り出します、というテレビの口コミも耳にしたことがある。俺だってイルミネーションは嫌いじゃないし、一人でクリスマスを過ごすよりこいつらと過ごす方が楽しみも増えるかもしれない。

でも。

俺の心はそれを阻もうとする。

脳裏にあの影が浮かんだ。涙の雫と、青白い世界の残滓が、フラッシュバックする。言葉が映画のエンドロールのように流れ込んでくる。のどの奥が熱くなるのが分かった。指先がかすかに震える。無いはずの微かな体温が指先を伝う。

「悪い、あんまイルミネーション好きじゃねえから」

無理な嘘を言葉にした。ファンヒーターが止まった教室の空気が、もう一段階冷えたのが分かる。二人は俺の表情を見て少し顔をしかめると、意味を理解してくれたのか、カバンを背負い無言で肩に手を置いて帰って行った。本当は、こんなことを口にしたくなかった。これでもし今生の別れをしてしまったら、俺はもつとどうしたらいいのか分からなくなる。だから、本当なら言っではいけない言葉だった。過去の自分を淘汰して、忘れたものとして許容すればよかったのに。

「智也」

ぼつりとつぶやく理沙の言葉が、雫のように聞こえる。

「……二人は、悪気があって言ったわけじゃないから」

「分かってる」

悪いのは俺だから、そう付け加える。

「違うよ」理沙の言葉が、残酷にも慈悲のように聞こえる。「悪いのは、この世界だよ。智也は悪くないから」

理沙が俺の背中を指先で掴んだ。あれ以来、こうした俺の言葉を否定する奴はほとんど現れなかった。でも、普通に接してくれ、と

という言葉が出ない限り、俺の中にはまだ甘えがあった。だから、どうしたらいいのか分からないし、考えもまとまらなかった。

やがて、教室に映える白雲は、銀に変わり始める。雪が降り始めたのだ、と気づくのに、そう時間はかからなかった。理沙は俺の裾から手を離すことなく、しばらくそうして俺の行動を待っていたかのように立ち続けていた。理沙はこうして俺を支えてくれていたのに、何もできない自分にどうしようもないやるせなさが募って、しばらく言葉を出すことすらかなわなかった。

俺の背中を見送る理沙を蹴るように教室を後にした後、俺はどうしようもない虚脱感に襲われていた。当たり前だ。無理に嘘をねじ込んで、本意とは逆の言葉を言うほど辛いものはない。おかげで、のどの奥にはまだ気持ちの悪い何かが渦巻いている。

階段を降り切ると、俺はしばらくその場で佇んだ。動作感覚を忘れてしまったかのように、体が動こうとはしなかった。指先の力が抜けて、上履きに足を引き締められている間隔がない。沈黙に制圧された慟哭が、体中を蹂躪しているような、そんなものに飲み込まれるような気がする。

けれどそこで、俯きかけた視線が、光に持ち上げられた。

一階の中庭に小さく分画された、ガーデンだ。花　あの白い花が、俺に何かを問いかけているように、花びらを見せている。

その時だけは、何故か何も心の中に浮かんでこなかった。いつもなら、言葉に出来ない憎悪が込み上げてくるはずなのに。花の柄を掴んで、花びらを無意味に引きちぎって、網状の葉を破り捨てる愚行に走りたくなるような衝動に襲われるのに。

花の上には少しずつ雪のかけらが積もり始めて、その白い輝きを一層強いものにしていった。綺麗だ。どうしてこんな花が生まれたんだろう、そんな問いかけが、ふと俺の中に浮上する。ひどく美しい、絶望と終わりを呼ぶ花。誰かがこれを、世界の終りに咲く花と揶揄したことがあったけれど、その言葉には誰も笑わなかった記憶があ

る。それくらい、詩的で、残酷な花だ。

気づけば俺は、一歩ずつ歩みを近づけて、ガーデンの前で立ち止まっていた。もしかしたら花が俺を呼んでいたのかもしれない、そう思えるような歩みだった。なんで、俺を呼ぶ？俺はお前たちに恨みしか持っていないのに。大切なものをことごとく奪われ、憎んでも憎み足りないのに

「……………どうかしましたか？」

俯く俺を、聞き覚えのある声が問う。顔を傾けて、声の先を見ると、エプロン姿の園芸部員の子がいた。右手に持つスコップと、アンプルや肥料の入った袋に、前は見なかったシャベルが不釣り合いに見える。怪訝な目で、彼女は続ける。

「前も、こんなことありましたね」

苦笑する彼女の表情に、俺は少しだけ救われる。

「そうだな」

「やっぱり、興味沸いたんですか、園芸」

俺の方を覗き込むような声に、俺は首を振った。口をすぼめた彼女は、「部員、一人しかいないのに」などと呟きながら、土の上に足をつく。長靴と土が重なり、氷柱が折れる音がする。

「やっぱり、少しだけやらせてよ」

自分でも信じられないような声が出た。彼女は疑いの目を向けることなく、笑顔で肯き、シャベルとゴム手袋をくれる。中までしっかりと冷気が行きわたったゴム手袋を発端に、俺の体中が震え、寒さが芯にしみる。指先がかじかんで、スコップをしっかりと握れるかどうかすら怪しい。

とりあえず土掘り返してください、と言われ、土にシャベルを押し付けて、土を掘り返していく。砂利が混ざっているのかと錯覚を覚えそうなくらい、土の中は氷柱だらけだった。

「そうだ」

「はい？」

凍えている花の下にアンプルを慣れた手つきで刺していく彼女は、

俺の方を見直して答える。

「名前、まだ訊いてなかったよ」

「そうでしたっけ？」

明日香って言います、と彼女は言うのと、俺にも名前を求めてきた。不思議だった。さっきまでは自信を喪失して何をしたらいいのか分からなかったのに、彼女はまるで俺に魔法をかけているかのように、俺の気持ちを持ち直してくれる。まるで 美紀のように。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1514x/>

白花に消えるとき

2011年12月27日23時52分発行